

華嚴宗と申す宗は、「華嚴經の円と法華經の円とは一なり。而れども法華經の円は華嚴の円の枝末」と云云。法相・三論も又々かくのごとし。

天台宗、彼の義に同ぜば別宗と立てゝなにかせん。例せば法華・涅槃は一つ円なり。先後に依って涅槃尚劣をとるとさだむ。爾前の円、法華の円を一とならば、先後によりて法華豈劣あにらざらんや。詮ずるところ、この邪義のをこり「此の妙彼の妙円実異ならず、円頓ひとの義齊そし、前の三をなと為す」等の釈置にばかされて起こる義なり。

止観と申すも円頓止観の証文には華嚴經の文をひきて候ぞ。又二の卷の四種三昧は多分は念仏と見へて候なり。「源濁れば流れ清からず」と申して、爾前の円と法華經の円と一と申す者が、止観を人によませ候へば、但念仏者のごとくにて候なり。但し止観は迹門より出でたり、本門より出でたり、本迹わたに亘ると申す三つの義古いにしえよりこれあり。これは且くこれををく。

「故に知んぬ一部の文共に円乗開權の妙觀じょうを成ず」と申して、止観一部は法華經の開會の上に建立せる文なり。爾前の經々をひき、乃至外典を用ひて候も爾前・外典の心にはあらず。文をばかれども義をばけづりすてたるなり。「境は昔に寄ると雖も智は必ず円に依る」と申して、文殊問・方等・請觀音等の諸經を引きて四種を立つれども、心は必ず法華經なり。「諸文を散引して一代の文体もんたいを該かぬれども、正意は唯二經に歸す」と申すはこれなり。

止観に十章あり。大意しゃくみょう・釈名しょうほう・体相へんえん・撰法ききょう・偏円ききょう・方便ききょう・正觀ききょう・果報ききょう・起教ききょう・旨歸しきなり。「前の六重は修多羅しゅたらに依る」と申して、大意より方便までの六重は先四巻に限る。これは妙解、迹門の心をのべたり。「今妙解に依って以て正行を立つ」と申すは第七の正觀、十境十乗の觀法、本門の心なり。一念三千これ此よりはじまる。

一念三千と申す事は迹門にすらな尚を許されず、何に況んや爾前に分たえたる事なり。一念三千の出处は略開三の十如実相なれども義分は本門に限る。爾前は迹門の依義判文えぎはんもん、迹門は本門の依義判文なり。但し真実えもんはんぎの依文判義は本門に限るべし。

されば円の行区まち区なり。沙いさごをか数ずえ、大海見を尚みるなを円の行いかなり。何に況んや爾前の教をよみ、弥陀等の諸仏の名号を唱うふるをや。但しこれらは時々よりよりの行なるべし。真実に円の行に順じて常に口吟ずさみにすべき事は南無妙法蓮華經なり。心に存ずべき事は一念三千の觀法なり、これは智者ぎょうげの行解なり。日本国の在家の者には但一向に南無妙法蓮華經唱ととなえさすべし。名は必ず体唱にいたる徳あり。

法華經に十七種の名あり。これ通名なり、別名は三世の諸仏皆南無妙法蓮華經とつけさせ給ひしなり。阿弥陀・釈迦等の諸仏も因位の時は必ず止観なりき。口ずさみは必ず南無妙法蓮華經なり。

此等を知らざる天台・真言等の念仏者、口ずさみには一向に南無阿弥陀仏と申すあひだ、在家の者は一向に念<sup>おも</sup>ふやう、天台・真言等は念仏にてありけり。又善導・法然が入門は、すわすわ天台・真言の人々も実に自宗が叶ひがたければ念仏を申すなり。わづらわしくかれを学せんよりは、法華經をよまんよりは、一向に念仏を申して、浄土にして法華經をもさとるべしと申す。此の義日本国に充満せし故に天台・真言の学者、在家の人々にすてられて、六十余州の山寺はう<sup>失</sup>せはてぬるなり。

九十六種の外道は仏慧比丘の威儀よりをこり、日本国の謗法は爾前の円と法華の円と一という義の盛んなりしよりこれはじまれり。あわれなるかなや、外道は常・楽・我・浄と立てしかば、仏世<sup>ほとけ</sup>にいでませ給ひては苦・空・無常・無我と<sup>説</sup>かせ給ひき。二乗は空觀に著して大乘にすゝまざりしかば仏<sup>いまし</sup>誡めて云はく、五逆は仏のたね、塵勞の<sup>ともがら</sup>囂は如来の種、二乗の善法は永不成と嫌はせ給ひき。常楽我浄の義こそ外道はあしかりしかども、名はよかりしぞかし。而れども仏、名をい<sup>忌</sup>み給ひき。悪だに仏の種となる。ましてぜん<sup>善</sup>はとこそをぼ<sup>覺</sup>うれども、仏二乗に向かひては、悪をば許して善をばい<sup>忌</sup>ましめ給ひき。

当世の念仏は法華經を国に失う念仏なり。設ひぜん<sup>善</sup>たりとも、義分<sup>當</sup>あたれりというとも、先づ名をい<sup>忌</sup>むべし。其の故は仏法は国に随ふべし。天竺には一向小乗・一向大乘・大小兼学の国<sup>相</sup>あひわかれたり。震旦亦復是くの如し。

日本国は一向大乘の国、大乘の中の一乗の国なり。華嚴・法相・三論等の諸大乘すら猶相<sup>いか</sup>応せず。何に況んや小乗の三宗をや。

而るに当世には<sup>流行</sup>やる念仏宗と禅宗とは、源方等部より事<sup>起</sup>をこれり。法相・三論・華嚴の見を出づべからず。南無阿弥陀仏は爾前にかぎる。法華經にをいては得道の行にあらず。開会の後<sup>のち</sup>仏因となるべし。南無妙法蓮華經は四十余年にわたらず、但<sup>ただ</sup>法華八箇年にかぎる。南無阿弥陀仏に開会せられず、法華經は能開念仏は所開なり。法華經の行者は一期南無阿弥陀仏と申さずとも、南無阿弥陀仏並びに十方の諸仏の功德を備へたり。譬へば如意宝珠の金銀等の財を備へたるが如し。

念仏は一期申すとも法華經の功德<sup>具</sup>をくすべからず。譬へば金銀等の如意宝珠<sup>兼</sup>をかねざるがごとし。譬へば三千大千世界に積みたる金銀等の財も、一つの如意宝珠をばかうべからず。設ひ開会をさとれる念仏なりとも、猶体内の<sup>ごん</sup>権なり、体内の実に及ばず。何に況んや当世に開会を心<sup>得</sup>えたる智者も少なくこそをはせすらめ。設ひさる人ありとも、弟子・眷属・所従なんどはいかんがあるべかるらん。愚者は智者の念仏を申し給ふをみては念仏者とぞ見候らん。法華經の行者とはよも候はじ。又南無妙法蓮華經と申す人をば、いかなる愚者も法華經の行者とぞ申し候はんずらん。当世に父母を殺す人よりも、謀反<sup>起</sup>ををこす人よりも、天台・真言の学者といわれて善公が礼讚<sup>云</sup>をうたい、然公が念仏をさえづる人々はを<sup>恐</sup>そろしく候なり。この文を止觀よみあげさせ給ひて後、ふみの<sup>文</sup>ざの人<sup>座</sup>にひるめてわたらせ給ふべし。止觀よみあげさせ給は<sup>速</sup>ずすみやかに御わたり候へ。

沙汰の事は本より日蓮が道理だにもつよくば、事切れん事かたしと存じて候ひしが、人ごとに問注は法門には似はず、いみじうしたりと申し候なるときに事切るべしともをばへ候はず。しょうひつ少弼殿よりへいの平三郎左衛門のもとにわたりて候とぞ、うけ給はり候。

この事のび候わば問注はよきと御心え候へ。又いつにてもよも切れぬ事は候はじ。又切れずば日蓮が道理とこそ人々は思をもひ候はんずらめ、くるしく候はず候。当時はことに天台・真言等の人々の多く来て候なり。事多き故に留め候ひおわ了んぬ。